

目に據にや、或攤の目にや、源氏には、けぢめさすと見えたり。

〔倭訓栞前編九計〕けち○中 源氏などに、のり弓にいふけちは、結の音也、碁のだめさす事をも、けち

さすといへる亦同字也。

〔圍碁式〕結事

半番過る程より、結を心にかけて、結鼻をとりて、敵に一手も先手を取せじと、次第を案つ付けて、さす也、はたをばかねて、結にいたまぬ様に打をくなり、敵の石をさしよき様に打なしてをかむとおもふ也、所詮勝負結により、能させば二十目などの負をさしよする也、手をとかなれども、鼻をだにも取はじめられぬれば、上手こたへて無術事なり。

〔源氏物語三〕なぞかうあつきに、このかうしはおろされたとへば、ひるより西の御かたの

わたらせ給て、碁うたせたまふといふ略中、ごうちはて、けちさすわたり、こゝろとげにみえて、きはく、しうさうどけは、おくのひとは、いとしづかにのぞめて、まち給へや、そこはちにこそあらめ、このわたりのこうをこそなどいへど、いで此たびはまけにけり、すみのところく、いでいでと、をよびをかめて、とをはたみそ、よそなどかぞふるさま、いよのゆげたもたどく、しかるまじう見ゆ。

〔宗長手記〕越年は三大永、薪酬恩庵傍捨密下爐邊、六七人あつまりて、田樂の鹽噌のついで、誹諧た

びたびに略中

碁盤のうへにはるは來にけり
うぐひすのすごもりといふつくり物

朝がすみすみくまでは立いらで

是も愚句つけまさりはべらんかし

宗鑑

宗長